

6. アンケート結果

回答数：59

● 今回のシンポジウムを何で知りましたか？

	回答数	割合(%)
JICAメールマガジン	10	19
ホームページ	12	22
友人・知人からの口コミ	6	11
OFCAから	22	41
e-mail	4	7
合計	54	

● 今回の公開シンポジウムに参加して：

	回答数	割合(%)
とても良かった	15	29
まあ良かった	26	51
普通	9	18
ややつまらなかった	1	2
つまらなかった	0	0
合計	51	

● 今回の公開シンポジウムにどのような事を期待されていましたか？

- Global Issueに対してJICA水産協力としてどう対処していくかということを楽しんできたが、一般論的な議論で終わったような気がした。
- 今後の水産無償のあり方がわかる事。
- 具体的な水産協力事業の将来展望等
- 水産分野がどう国際協力に関わっていきけるのかを具体的なレベルでの話し合いが行われるのを期待していた。
- カリブ海沿岸の水産にはずっと注目していたため今後の水産協力の方向を知りたかった。
- 食糧確保が難しい途上国で、どのように生物多様性水産資源管理を考慮したプロジェクトが行われているか知りたかった。
- JICA 水産無償のネックと打開方策
- 今後の水産分野への援助の方向性を貴事業団がどのように考えているのかを知りたかった。
- 水産協力がGlobal Issueに対応しているのか、役に立っているのか（役立つのか）という点での掘り下げた議論
- 水産無償案件の形成に役立つ知識の養成
- JICA水産課の援助活動の方向性を知りたかった。
- 生態系のモニタリング
- 初参加なのでどんな話が聞けるのかわからなかったが楽しみにしていた。
- 技協の方向性とJICAの方針
- 協力における「無償援助案件」の位置付けを客観的に分析できるのではと期待してきた。
- 今後の技術協力の展開、方途、現在の問題点、課題
- まだ国際協力についての知識が不足しているため、実際どのようなことが行われているか、何が問題かこれからどのようなことが必要か、どのような人材が求められているのかを知りたいと思った。

- 無償援助の今後の方向性について
- 水産協力関係者の現状認識の確認
- 現在、世界中で行われている水産開発の事例発表及び各プロジェクトの問題点、問題解決手法についての説明、これからの水産分野協力のあり方について
- JICAが掲げるGlobal Issueである貧国、環境についての水産分野の協力の取り組みとこれからの展開
- 多面的な意見、見方の交換
- 水産分野のプロジェクトの実状を学習出来ることを期待した。
- プロジェクトの実際と技術協力手法及びその問題点、成果を知りたかった。
- 水産分野における国際協力のグローバルな要素の検討
- これからの水産分野の国際協力が目指すべき方向をつかむ事。
- 協力隊に水産分野で参加を希望しており、現地ではどんな活動が行われているのか知りたかった。
- 今後の水産協力のあり方を知る事。
- 水産分野の国際協力の現状と今後の展開と問題点
- 今後の協力がどのような方向に進むのかを知りたいと考えた。
- 現状を知るため。
- 標題についてある程度の方向性が見えるものと思っていた。
- JICAの水産分野について具体的な方向性を伺えるものとして期待していた。
- Global Issueへの取り組み方、方法論の討議
- 個人的に水産分野は新たに従事した分野なので、本件テーマ関係者の意見知識を参考としたかった。
- 貧困国におけるJICAのプロジェクトのあり方
- 水産分野における国際協力のあり方及び今後のJICAの協力に対する現場（専門家）からの逆提案
- 水産分野で国際協力に関わり第一線で活躍されている人達の意見・経験・助言等を聞く事。
- ハードにつながる水産開発の活動報告
- 特に大きな期待はしていなかったが、大変有意義な情報が得られると思った。
- 水産協力の現状を知る事。
- プロジェクト報告
- 水産分野での国際協力がどのようなものかを知る事。
- 国際協力における水産分野に必要とされる要素
- 水産における国際協力のあり方の基本的考え

●今回の公開シンポジウムは、事前に期待していたことと合致していましたか？

	回答数	割合(%)
非常に	9	21
まあまあ	19	45
普通	8	19
あまり	5	12
全然	1	2
合計	42	

●今回の公開シンポジウムで良かった点、悪かった点があればご記入下さい。

(1) 良かった点

- 水産分野課題別検討会というものがあることを知った。この会の結果をJICAの活動において、どう具体化していくかについても検討しないと会議の意義が無いのではないかと。
- パネリストの皆様の話がそれぞれ面白かった、役に立った。
- プロジェクト事例報告が具体的で良かった。

- パネルディスカッションでフロアからの質問を受け付けていた点
- 単なる講義に終わらず、聴く人の疑問をそれぞれ解消できる手段が確立していた。
- 日本国の国際協力を代表しているJICA側との対話機会をもてた事。
- 様々な方の色々な意見を聞くときができた。
- 概念的な方向性だけは間違っていない。
- 水産分野におけるODAのあり方、実際にどのように活動を行っているかが少しわかった。
- 広い分野のパネラーの参加
- パネルに外務省の参加があった事。
- 様々な形で水産に関するパネラーの方の話を聞いた点
- 水産分野課題別検討会の内容が良かった。
- パネルディスカッションの内容が興味深いものであった（水産分野の国際協力の背景の理解を深められた）。
- 水産分野課題別検討会中間報告によって水産協力量針の一端がわかった事。。
- メンバーの人選
- プロジェクト報告、特にカリブ海の環境対策、海外の現状がよくわかった。
- こういう機会があること自身がよい。
- カリブ海域での案件の利用、活用について新しい事実を得た。
- わかりやすかった点
- NGO、大学、コンサルタント、省庁、JICAといろいろなステークホルダーが参加し、意見を交わしていた事。
- 水産分野課題別検討会での検討内容が把握できた。
- パネラーの方々の発言が明快であった。
- パネルディスカッションで様々な立場からの話し合いを聴くことができた点
- トリニとマラウイのプロジェクトの進行状況（活動や取り組み）を直接リーダーから聞くことができた
- 現在の水産プロジェクトの実状が理解できた。
- トリニダッド・トバゴの広域技術協力は今後のJICAのプロジェクトの方向性として有効であろうとの感を強くした。
- 異なった考え方、また人々の論理に接することが出来た事。逆に言えば、今回のテーマに関してはまだまだコンセンサスに近い統一はなされておらず、議論自体がごく初期的なレベルにある。
- これから目指すべき水産協力の姿を見る事ができた。
- 今の水産の協力の仕方についていろいろな意見があることがわかった。これからはただ協力したいと思うのではなく今日出た問題を考えながら自分なりに答えを出せたら良い。
- 水産協力に関して日本政府関係者のポリマーを確認出来た事、現場のレポートが聞いた事
- 机があった点が色々記入ができて良かった。現状を細かく説明してくれた点
- カリブ海における広域技術協力についてはこの様な取り組みはアジア諸国での活動事例を見ることが多かったが、カリブ海での事業は国情の違いなども踏まえた新しいビューポイントが加わった。
- 協力の現場の努力がわかった。
- 現場の実際の話があった事。各報告とも良いものであった。世界的規模（視点）からの話があった事。
- 大変アカデミックだった。
- プロジェクト報告が比較的具体的になされていた事
- パネラーに政府批判的な人も含まれていた事。JICA側が本件シンポジウムを有益なものにするための努力
- パネルディスカッションで多くの立場の意見を聞いた。技術協力の人材育成の面での意見があった事。
- 様々な立場からのパネルが揃っており、パネル同士の議論もとても興味深かった。
- 水産を通じた総合的な支援の重要性、また日本という国がこの分野で有する特殊な立場を感じさせられた。
- トリニダッド・トバゴの広域技術協力の事例報告、外務省の考え方がわかった。次のプロジェクトへのヒントが得られた。キーワードは「貯水池機能」
- 後半のディスカッションにおいて各分野のそれぞれの意見を聞く事ができた。
- わかりやすかった。

- 水産分野の生む、育てる、獲る、食べるという食物連鎖の中に国際化、環境問題、貧困を関連づけた事。
- 水産分野の国際協力のあり方、問題点を総括的に勉強する事ができた。

(2) 悪かった点

- JICAは水産協力の今後について、どういう観点についてやっていくべきかという面で、もっと突っ込んだ議論をしても良かったのでは。
- 会場が寒かった。冷房が入っているようだった。
- 沿岸域管理、または生態系保全分野のパネラーから、水産開発が環境に与える影響とその軽減のためのプロジェクト（又は技協）事例について話を聞いてみたかった。
- 挨拶は不要或いは簡単に、儀礼的な言葉は不要と思う。報告者に十分な時間を与え、聞き取り易い口調を心がけて欲しかった。
- 若手が少なかった事。
- 全体としてポイントがぼやけていた。海からの視点、漁業者の視点が欠けていた。
- 持続的な利用や生物多様性の保護などの言葉がよく出てきたが、それをどのように行っていくか具体的な展望が見えてこない。
- ほとんどが自分の知っていたあるいは考えていた事であり、新たな発見が少なかった点
- 水産分野課題別検討会の説明が少々不足していた（時間の関係もあろうがじっくりできなかつたのか、又コピーが小さすぎ、見にくい点があった）。
- 水産分野課題別検討会中間報告に関する説明時間が十分になかった事。
- 時間の遅れ、配分
- パネリストに他のセクターの人材の参加を組み入れて欲しかった。自己讃辞だけのディスカッションに終了した感あり。
- 中間報告のテーブルの字が小さくて見えなかった。
- プロ技の説明が後半のパネルディスカッションにあまり生かされず、ただの事例紹介になってしまった事。
- 他の参加者の意見をもう少し卓上に乗せられるようにオーガナイズできればなお良い。また水産の中でも漁獲漁業と養殖を同時に論ずるのは焦点がややぼやけてしまう気がする。
- 時間が短く、発表内容が分かりにくかった。
- 後半のパネルディスカッションでは、話のテーマが右往左往してGlobal Issueに関する話に集中していなかった。
- マラウイのプロジェクトは問題点の解決方法をあまり持っていないように感じられる。
- 総花論的な論議で物足りなかった。
- プロジェクト報告が従来型だった。もう少しGlobal Issueの観点に絞って報告していただいても良いのでは。
- 中間報告がよく分からなかった。
- 沿岸小規模漁業と大規模漁が抱えている諸問題が明示的になされなかった。沿岸漁業の進展には限界がある。今後どの様な視点で援助をしていくのかを知りたい。
- 会場が寒かった、飲み物があつという間に無くなった。
- 前半の説明（事例の紹介を除き）は、べき論に終始していた。あるべき姿やGlobal Issueとの兼ね合いなど面白みに欠けた。水産分野課題別検討会ではもっと具体的な実施策を検討してもらいたい。
- 論点が集約されていない。
- 予定時間内に終了してもらいたい、フロアの意見は短く要点を出すように求める事。
- パネルディスカッションでは、例えばテーマをもっと絞って3つ位に決めてから、そのテーマに対して討論を進めた方が良かったのではと思う。
- 発表者は時間を守るべき
- 報告時間が短かった。
- ケーススタディではなく、概論として水産分野における国際協力を打ち出してもらいたい。

●今後のシンポジウムに取り上げてほしいというテーマがありましたらご記入ください。

- 資源管理における協力のあり方、Co-managementをどう進めるか。
- 顔の見える援助とは何か（日本業者のタイドの話を含む）？
- 沿岸域開発と水産協力
- 国レベルでの国際協力のあり方、このような意見等がどのようにJICAの方針に反映されるのを見られる機会が必要である。また、水産関係者間で国際協力のあり方が認識された上で水産分野以外のセクターをどう水産分野の国際協力に貢献し、関わっていけるのかといったテーマで話し合いが行われたら面白いと思う。
- 持続的漁業と水産開発
- 今後水産分野の国際協力で求められる人材
- 参加型のプロジェクトへの取り組みについて
- CBFM
- 今回のパネルディスカッションのパート2を行う中で産官学の協力体制、目的について
- 水産インフラのリハビリのニーズ
- 海洋環境型構造物（消波施設、増殖礁ブロック、藻場設置等）
- 今回のテーマを継続してほしい
- 案件形成、良いプロジェクトとは何か？
- 水産というテーマではなく「水産の技術開発と貧困」「水産の技術開発とジェンダー」等個別のテーマで掘り下げて、開催、協議すれば良い。
- 国際水産科学（研究）協力、特に日本とアフリカ間研究協力
- 若手対象のものにも参加したい（このようなシンポジウムだとやはり質問する人が業界のVIPに偏りがち）。
- 人口が少ない国（例えば5～10万人）の人的開発について。太平洋島嶼国は人口が少なく技術者の数が少ない。その中でどう人材育成を行うかが問題となる。
- 最貧国における複合農業（養殖）の理想的な型（技術者論も含める）
- 農民参加型の水産開発の事例
- 「漁村振興のモデリング」をテーマにJICA水産援助が取り組むべき話題を整理してみたい。
- 議論の範囲が広いわりに時間が少なかった（水産の分野毎に限定、又は討議が出来れば好都合であった）。
- 個別専門家による水産分野のテーマを取り上げたシンポジウム。あるいはもっと小さな形でのワークショップの開催
- 同種の問題について分野と焦点をしぼって取り上げて欲しい。
- 環境、貧困、ジェンダーがキーワード（保健教育を含む）特に漁村社会、漁民生活にスポットを当て、これまでのプロジェクトがどのような効果をもたらしたのか。
- 利用加工について
- 国際協力報告アジア編、他の先進国との水産協力におけるつながり
- 資源管理技術協力の実際、水産の技術協力と貧困
- 水産に限らず現場からの報告を中心に議論する今回の方法が良い。失敗例の報告も必要ではないか？
- これまでJICAでなされてきた水産協力の評価のフィードバック
- 今回のテーマはとても良かったと思う。
- これからの国際協力を志す若者の道標となる事。
- ドナー、専門家JICA、関係者間で21世紀に望まれる国際協力のあり方を議論したい。
- プロジェクト終了後の支援のあり方について

●今後JICAの協力がどのようにあるべきかご提言あればご自由に記入下さい。

- このようなシンポジウムをもっとやるべき
- 一つの計画に対しコンサル、業者、専門家等が意見を交えつつ振興させていくような援助が個人的に望ましいと思う。その際の要となり、当該国との橋渡しをする機能を持って頂けたらと思う。

- ニーズに合致した協力であるべき
- 事前調査、事後評価を実施する側と実施される側から出し、積極的に公開することが必要では。また、より理想を言えば、第三者機関による評価もベターと思う
- 貧困対策としての水産分野の協力という割には、お金の掛からない漁業に対するアイデアが欠如している。途上国では定置網の維持は大変難しいのでは？
- 本当に現地の人たちの生活を考えて活動しているのか、世銀の様に押しつけ援助であっては10年20年後もその国の状況は良くならないと思う。これに気づかなければ物から人へ変わったとして結果は変わらないのではないだろうか。
- 今後水産資源の開発援助を途上国に行っていく必要があると思うが、日本が経験したような乱開発にならないような環境教育（持続的な資源の利用）を含めた援助が必要
- 地域住民を第一に考えたプロジェクトを行っていくべきだと思う。また若い人（これから国際協力に関わろうとしている人）にチャンスを与えるシステム作りを希望する。
- 具体的な技術援助よりも現地の研究者や教育者のレベルアップを行う協力が必要と思う。
- 川上（森林）から川下（沿岸）までの自然資源管理手法、流域管理
- 個々の案件における調査対処方針と全体の協力量針と整合していないことがある。これは組織と個人の理解の違いとも考えられることから、当然起こりうる事であるが、方針が公表されているなら状況は大きく改善される。
- プロジェクト間はもちろん、しかしSector Linkageはもっと重要と思う。
- 省庁、コンサルタント、NGO等が積極的に協力しあえるプロジェクトの提案、開発調査後の案件についてのコンサルタントと協力した積極的な実現、若いコンサルタントにチャンスを！
- 協力を現場で行う人材の育成（確保）を事業団として積極的に行っていただきたいと切に願っている。
- 現地の人々にとってプラスであるような協力、現地の人々の自立を助ける形の協力が必要だと思う。
- 単なる水産技術の移転に焦点を当てるだけでなく、水域環境の保全、漁村振興を核としたプログラムを実現すべきと思う。
- 現地産業の振興と食料事情の改善、現地事情に見合った内容
- 水産協力に関しては理論的な考えも重要であるが、資源管理も含め実践的な対応をすることがより必要であると思う。
- 変換期に直面している現在、行いたい普遍的な問題に絞って当面は行動してくれば良い。
- ハードとソフトが2極対立的にとらえられがちであるが、これからは両者の相互補完連携が重要ではある。
- 現在どういった状況がよくわかりませんが、コスト意識を強く持つ事や協力をして得た結果について世間一般にPRする事などが考えられる。
- 供与する側、業界の要望などにとらわれず、現地の人々が本当に生活向上出来る所を汲み上げてもらいたい。
- 地域（村落）開発型の水産プロジェクトの実施、人材育成のために大学等の関係機関ともっと踏み込んだ努力が必要ではないか。
- 観光や地域づくりの専門機関との連携の中で海外に適用できる国内ノウハウを提出していくことが必要である。
- 「JICAとしてどのような水産技術をやるのか」をはっきりさせる（我々コンサルタント、専門家も知恵を出し合う必要がある）。
- 途上国の現状とあるべき姿のギャップを埋めるには、どのようなアプローチが必要であるかを明確化する。
- 北海道研修センターにおいても専門家の話を聞く機会があるが、本日のようなシンポジウムを地方でも実現していただけたら良い。

●今後どのような催し物に参加してみたいですか？

	回答数	割合 (%)
講座や講演など、座学タイプのもの	10	20
実習・実技研修など、参加型のもの	15	31
ワークショップのような意見交換型のもの	23	47
その他〔識者のディスカッション形式の催し物〕	1	2
合計	49	

●その他ご感想等ございましたらご記入願います。

- プロジェクト報告は大変正直に話をされていたと思う。しかしそのプロジェクトにより現地の人々がどれほどの収入、漁獲を得たのかは見えてこなかった。トニダッド・トバゴ、カリブ海水域でのロブスター漁業においてかご漁具の導入の話があった。3枚網漁具にも問題はあるが、かご漁具によるゴーストフィッシングも大きな問題となりうる。その対策はなされているのか心配である。水産は産業であり、客が値段を決める場合が多い。社会的弱者である漁業者が、大きな産業という流れの中での現状をとらえる事も必要と思う。又、環境という言葉が何度も出てきたが‘環境’とはいったい何なのか、はっきりさせる必要があると思った。
- マラウイについて、プレゼンした方も言うておられた様に、今のサハラ以南のアフリカは日本には理解できない状態にあります。この地域の多くが貧困状態で、それは単に食料が足りないだけではなく、根本には教育の問題、国を動かす人達のモラルの問題にあると思う。その他の地域で行っている協力とアフリカの協力は優先順位が全く違う（僕も以前これについて悩みました）。
- 貧困対策と環境問題は密接に関係していると思うが、貧困対策を解決するにはある程度の開発援助が必要であり、その際これまでのようなハードの援助ではなく、水産資源管理学（日本が失敗した管理を含んだもの）を訴えるソフトの援助が必要と思う。
- 水産開発が、貧困、ジェンダーの重視に移るのであれば、水産無償から専門家、協力隊、研修へODAの金額の比重が変わるのでしょうか。水産無償による貧困、ジェンダーのコンポーネントには意味がないと思います。
- 勉強になりました。今後も参加を希望します。養殖池の餌料自然発生システムに関しては、過去の実験データからノウハウが多少あります。機会があれば資料を差し上げます。
- Global Issueの観点からクロスセクターの課題が欠かせない。
- 本日協議された水産協力の重要性は、必ずしも他セクターの人間に理解できるものではない。
- 水産の貧困、環境等に果たせる役割を国別に明確にすべき、画一的な食糧供給、現金収入といったTermは使えない。例：多くのアフリカ内陸部ではほとんど魚を食べていない。消費者は沿岸及び都市住民であり国レベルで評価すべきではない。また、多くの場合、漁民は農民より豊かである。
- クロスセクターにおよぶ水産協力では、水産にOut PutをこだわらないNGOが成果を見せている。今後はNGOとの協力方針も検討すべき。
- 国際協力、産業開発という形は若い人にとってもかなり浸透してきている。そしてそのために人材として参加しようとする意欲ある若い人も増えてきている。現在、日本にはいろんな世代がいる。若い能力のある人、教育を開発分野で受けた人と共に、年をとった人々の中にも協力に参加したいという人が多くいる。また教育のない人もいる。特に水産学は漁労技術をはじめ加工、増養殖においても多くのいろいろなバックグラウンドを持った人がいる。これらの人々がそれぞれの立場において国際協力にもっともっと気軽に参加できるような支援体制を民間分野において構築していく必要があると考える（みんなが誰もが参加する国際協力の実現！！を目指そう）。
- 大先輩方が参加なさっているのであまり大胆な発言ができない人も多かったのではないのでしょうか。働きざかりでリストラにおびえる年齢層だけを集めた会合を持った方が面白いと思います。私も今回は多くの意見を持ちましたが発言を控えました。
- 様々な意見を聞くことができとても良かったです。

- これからの開発のあり方、JICAのあり方について勉強になりました。
- 専門家です（派遣経験はありません）。従来から移転現場においては漁業者の終業基盤づくり（生産技術ではなく組織（ソフト）が必要ではないかと考えていました。そのような意味で米坂さんの指摘された社会的技術協力の必要性について同感しました。生産技術や加工技術の移転は行われても漁業者の生活基盤である漁業集落についてなされた案件は知りません。漁業者の流動性（居住の）を止める（結果的に漁業という産業基盤を安定化させる）という意味からも、漁業者の組織作りは有効であり、もっと大きい意味では、集落に対する社会的アプローチにより分析して構築するヒントを作ることは必要であると思います。水産でいう環境は定義が難しく、漁業は被害者であると同時に加害者の立場も持っている。「水産特性」（地域に関係無く産業として持つ固有の性質／性格）をもっと吟味する必要があるのではないかと思います。
- Global Issueを今回のシンポジウムのテーマとするのであれば、パネラーにもう少し工夫が必要ではなかったか。JICA内にも貧困環境ジェンダーに詳しいリソースパーソン（担当課職員や専門員など）がいるので、こうした人達をもっと活用すべきであると思う。今回のパネラーは水産をバックグラウンドに持った人だけに偏りすぎていたと思う。様々なバックグラウンドを持った人が入ってこない議論の展開が同じになってしまう。
- 発展途上国の水産振興について協力する際、対象技術は当該国の国情、環境に受入れ可能なものであることが必要である。基本的には日本やヨーロッパなど北半球高緯度地域国で開発された知識や技術を移転することになる。しかしマラウイ国での魚養殖に関し説明があったように、養殖魚に与える餌料が不足しているのが一般的である。日本式に考えれば、餌料を探すところであるが、東南アジアなど開発途上国では家畜の糞尿から根菜など様々の材料が活用されている。より現実的な対応をするために、専門家に中度開発国の人材を活用することができないかと考える。協力計画実施に当たり日本の技術・設備を基準にすることなく、現地環境・生活条件を十分に理解し、現地に適応しやすい知識・技術・物を移転することが必要である。
- 大変興味深いシンポジウムでした。ありがとうございました。水産に関するビジネスモデルが無いため、世銀等からお金を受けることができないとの話があったが、そもそも漁業に関するビジネスモデルは不可能ではないかと思えます。まして、世銀が言うようにお金が返してもらえないから融資ができないと言っているようではあまり期待しないことです。日本でも漁業者の現状は借金まみれで新規就業者も少ないと思えます。それは自然相手に行っている生産活動の難しい点だと思えます。むしろそういう所にこそ日本として協力すべきではないかと思えます。
- 水産分野の国際協力には水産業→産業、水産地域→生活の2つが考えられる。後者は取り組み途上であるが今後両者がどの様に連携して進めていくかが大きな課題であると考えます。水産地域（漁村）がかかえる問題点は貧困、ジェンダー、教育、保健等、すでに他分野で取り組まれているが、水産業漁村の特性を考慮してトータルプログラムとして考えるべきであると考えます。当然地域を大きくとらえると流通情報というキーワードも重要である。
- 水産分野課題検討会の中間報告のうち、「問題点（マイナス面）」として“水産色が薄まり水産の専門的視点が薄まる”との点が掲げられている。これらのGlobal Issueの対応を考える場合、“水産業、漁村の特性”を明確にすることで“水産分野におけるGlobal Issueへの対応”が可能となるのではないのでしょうか（他分野のまねではなく水産独自のものを確立する）？
- 水産分野の定義とは？パネルディスカッションでの議論から受けた印象では水産学を専攻した方々にだけの分野なのかという気がします。これからの協力のあり方としてGlobal Issueが掲げられている事を考慮すると多くの分野の専門家に開かれたものであるべきではないのでしょうか？有意義なシンポジウムに参加させて頂きありがとうございました。
- 私は水産を勉強している学生なのですが、本当に卒業してから出来ることの少なさを思い知りました。でも今日話を聞いて現実少し見えてきたので良かったです。ありがとうございました。
- 水産分野課題別検討会中間報告の1、なぜ水産協力を行うのかについて。国際協力の目的として1～3まで示されているが、日本国民の税金によって実施されているJICAの2国間協力においては3の日本の国益への裨益を最優先させるべきで、投入した我が国の税金が将来我が国民に還元されると期待できる協力に

限るべきである。世界規模の下では1及び2についても世界における我が国の地位や安定の確保に必要であるが、これらについては全世界の状況をながめながらバランスよく協力する必要がある、これは国際機関が中心となって協力する性質のものであり我が国もそのための分担金を拠出金として税金の中から出している。我が国の経済状況が良い時ならまだしも「おれの方がもっとかわいそうだ」と思いながら自殺している納税者が増えている中で、貧しいからとかかわいそうだという理由だけで我が国の税金を使った協力を行うことはもはや納税者に対して説明できないのではと感じています。最後まで書いて気が変わったのですが日本の国益へ裨益するものの中で、人道的又は社会経済の安定に資する水産協力というのはいかがでしょうか。

- 現場重視の姿勢が大事であると思った。
- パネルディスカッションにおいて水産と環境分野における立場の異なる方々の様々な視点からの現状と意見を聞いて良かったです。

マラウイについて：養殖というものはそれなりにコストがかかるし定着するまで時間もかかるといいますが最貧国において果たしてちゃんと定着するのでしょうか？

カリブ海について：カリブ海は台風が多いイメージがあるのですが、定置網の急潮被害はあるのでしょうか？又あるとしたらどのような対策を講じているのでしょうか？そして被害が起きた場合はどうするのでしょうか？広域技術協力について漁業的に問題のある国（例えば便宜置籍船保有国・各鮪委員会に未加入のベリーズ等）にも無条件で協力を行っているのでしょうか？非常に中味の濃いシンポジウムでした。ありがとうございました。

- 水産分野課題別検討会は会で検討されているJICAの協力指針の最終的な案はいつ頃できあがるのか。またどの様に発表されていくのかを教えてください（HP等でも公表されているのかどうか等）。
- パネルディスカッションは会場発言者の質問、提言などもう少し端的にまとめられた方が良かったのではと思われるものが多々あったと思う。例えばパネラーのプロフィールなど事前情報としてインフォメーション（国際協力のあり方についての自論なども含めて）が欲しかった。また事前に質問などを収集した上で進めても良いのでは。たぶん議事進行は大変だったのではないのでしょうか。
- 現在の日本にピン、缶詰製造の技術者がいないとお話がありましたが、その通りと思います。私は商社で輸出缶詰を扱い、第三国で生産して欧米に輸出し、又、中国、インドネシアに日本で売れる缶詰を作らせるために日本から技術者を派遣しましたが、15～25年前ですら50才以上の技術者しか現地で通用しませんでした。これらの人はすでに65～70才ですから日本での技術者はいないと思います。その理由は日本には缶詰の大きな市場が無く、日本の缶詰は輸出産業として成長したからです。缶詰輸出が20年前に終了した時点で日本での缶詰技術者のニーズがなくなりました。
- “JICAにおける水産分野全体の協力方針”はどこで見ることがのでしょうか。
- “日本は漁業大国ではない／漁業技術先進国ではない”中で年間70億の金が海外に援助されている。何が一番お金をかけているか。
- Hard/Softの援助があるがSoft援助からなかなかHardな援助案件で出てこない！
- 実際に現地の生活向上につながる案件にお金をかけていないのではないか。GeneCon/商社がうまみを感じる案件にならないから、実施されないのではないか。
- 協力隊帰りの青年に就職先がないという話があります。そのような現地情報を有する人々をJICAに取り込み現地に足のついた案件を実施できるシステムを作り上げてはどうかと思う。
- 外国にIT援助をするのみならず、JICA自身もIT技術を120%活用して情報を収集、分析、公表してもらいたい。
- Global Issue化するマイナス面として、水産色が薄まり水産の専門的視点が弱まると挙げられているが、貧困国への協力の場合などでは水産が単独で活動するには問題点が多い。餌料も養魚用水もない地域で養魚を根付かせるためには、水産技術以前の問題が大きく「人間の食べ物が足りてはじめて魚の餌を考える」ことから地域の生活改善が前提になる。このため、他分野との協力の中でこそ成果が期待できるのではないか。水産色が薄まることはむしろ社会開発の一環としての立場を示すものであろう。
- フロアからの意見があった「水産でその地域を改善するだけでなく、地域を改善するために水産がどの村に役立つか」には同感する。

- 世界でもっとも魚に関するノウハウを有する日本人が水産を通して貧国等への取り組みを支援することは他の分野とは違った意味合いを持っていると思います。ところで国内の地域産業振興で一つの重要な切り口になる産業観光というアプローチ、魚影の濃いカリブの海で釣りをさせそれを自ら刺身で食べられる（あるいは焼いて）低価な宿泊施設があれば、定年後にでも滞在したい人は多いのでは？彼ら日本人観光客は皆が魚に関する何かのノウハウを持っており、それが受入れ地域に伝わっていくと思います。ソデイカのように現地では利用されないが日本では価値の高いものも輸出となるとそう簡単ではないでしょうが、日本人を呼び込むことで違った活用の仕方が出てくるのではないのでしょうか。
- 国際協力事例研究として大変参考になりました。次の専門家としての活動に生かしたいと思います。

別添 1 参加者

別添 2 配付資料

- マラウイ在来種増養殖技術開発計画
～生物多様性の保護と養殖開発～
- トリニダッド・トバゴ持続的海洋水産資源利用促進計画
～カリブ海における広域技術協力～
- 水産分野課題別検討会 中間報告

別添1 参加者

氏名	所属
Pravaker Mishra	東京大学海洋研究所
Suadli Ahmed	JICA長期研修員 (チュニジア)
足立 征一郎	(財)海外漁業協力財団
荒 高弘	東京水産大学
飯沼 光生	国際協力総合研修所
五十嵐 誠	(株)国際水産技術開発
石井 丸久	ヤマハ発動機株式会社
石原 晃	(株)シーパックス
伊藤 謙三	ヤンマー(株)
伊藤 治夫	CRC海外協力(株)
伊藤 靖子	東亜建設工業(株)
井上 年行	復建調査設計(株)国際事業部
岩尾 恒雄	エル・サルヴァドル沿岸湖沼域養殖開発計画
植岡 龍太郎	株式会社大洋ライフプラン
打木 研三	元JICA専門家(水産増養殖ザンビア)
江口 秀伸	(財)海外漁業協力財団
太田 三洋	長谷川鉄工(株) 東京支店
大塚 浩二	(財)漁港漁村建設技術研究所
大橋 元裕	(株)国際水産技術開発
奥村真紀子	JICA国内連携促進課
尾上 保子	横浜国立大
影正 一夫	前田建設工業(株)
加藤 守	(財)海外漁業協力財団
甲斐 幹彦	東京大学海洋研究所
片岡 秀峰	興国鋼線索株式会社
越野 雄治	興国鋼線索株式会社
神谷 裕	日本鯉鮪漁業協同連合会
北浦 浄児	
北里 良博	(財)海外漁業協力財団
紀野 千尋	(社)海外まき網漁業協会
木下 栄二	豊田通商(株)
木下 献一	(株)間組 国際事業統括支店 営業第二部 第一課
木村 亜由美	筑波大学環境科学研究科
刑部 博人	北海道大学
倉持 繁	(財)海外漁業協力財団

別添1 参加者

氏名	所属
黒倉 寿	東京大学大学院農学生命科学研究科
小杉 廣	日本SAARC研究会 (JSSS)
近野 大輔	(株) 守谷商会
近藤 衛	CRC海外協力 (株)
斉藤 雅之	(株) エコー海外事業部
佐々木 孝夫	(株) I.C.Net Ltd.
佐川 俊男	(社) 国際農林業協力協会
佐藤 啓一	岩手県漁業取締事務所
三瓶 宜弘	農林水産省国際協力課
島崎 貴志	(株) フジタ
清水 幾太郎	独立行政法人さけ・ます資源管理センター
志水 浩彦	日本鯨類協会
杉本 たかしげ	東京大学海洋研究所
鈴木 信毅	JICA理事
関 千種	システム科学コンサルタンツ (株)
芹川 悦子	東海大学
高木 南海雄	(財) 海外漁業協力財団
高城 浩	オーバーシーズ・プロジェクト・マネージメント・コンサルタンツ (株)
高橋 淳	(財) 海外漁業協力財団
高橋 邦明	水産エンジニアリング株式会社
高柳 節男	ヤマハ発動機株式会社
田中 一彦	(株) 日本開発サービス
田口 定則	JICAOB
田中 真一	特定非営利活動法人エバーラスティング・ネイチャー
田中 秀幸	(株) 国際水産技術開発
田中 好雄	田中技術士事務所
田村 陽子	インテムコンサルティング (株)
千国 史郎	芙蓉海洋開発 (株)
寺尾 豊光	水産エンジニアリング (株)
寺島 裕晃	JICAモーリシャス
土井 正典	インテムコンサルティング (株)
徳田 進平	JICAアフリカ・中近東・欧州部アフリカ課
所 和正	ヤマハ発動機株式会社
鳥居 道夫	水産エンジニアリング (株)

別添1 参加者

氏名	所属
長澤 直毅	橋本産業（株） 本社工場 製造部
長島 聡	日本福祉大学大学院国際社会開発専攻
長塚 千年	豊田通商（株）
楢島 安	
新村 由紀	システム科学コンサルタンツ（株）
西崎 孝之	JICA農林水産開発調査部林業水産開発調査課
野呂 忠秀	鹿児島大学水産学部海洋センター
蓮沼 啓一	（株）海洋総合研究所
長谷川 正浩	エル・サルヴァドル沿岸湖沼域養殖開発計画
馬場 学	水産庁海外漁業協力室
林 良樹	大木建設株式会社
飛田野 圭	北野建設株式会社
深村 芳孝	（株）地崎工業海外事業部
星野 毅明	三洋テクノマリン（株）
細川 明快	（財）海外漁業協力財団
堀之内 康宏	（財）海外漁業協力財団
本田 勝	JICA農林水産開発調査部林業水産開発調査課
正木 康昭	日本エヌ・ユー・エス（株）
松浦 榮一	（株）エコー海外事業部
松浦 茂樹	（株）大林組 海外建築事業部
松村 好造	（株）エコー海外事業部
松本 博之	（社）海外水産コンサルタンツ協会
水田 加代子	JICA専門技術嘱託
三橋 延央	東京水産大学大学院
三春 敏夫	株式会社 国際水産技術開発
水木 歩	株式会社 京玉コンサルタント
村上 光由	日本鯨類研究所
森 啓介	徳島県立農林水産総合技術センター水産研究
森光 律夫	フォーラム・ツー・ワン
安永 義暢	（財）海外漁業協力財団
柳沢 満夫	
柳瀬 一尊	東京水産大学大学院
藪並 整司	
山崎 信一	川鉄商事（株）

別添1 参加者

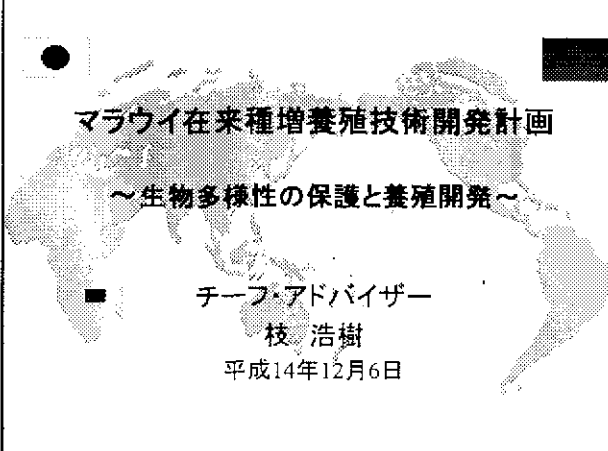
氏名	所属
山崎 隆義	マラウイ在来種増養殖技術開発計画・国内支援員長
山成 喬彦	三井農林海洋産業（株）
吉田 勝美	JICA無償4課
吉田 健一	東京水産大学
山本 幸雄	システム科学コンサルタンツ（株）
和光 信	(株)極洋 総務部 水産コンサルタント室
和田 極	三洋テクノマリン（株）
渡邊 誠	農林水産省国際協力課

マラウイ在来種増養殖技術開発計画

－生物多様性の保護と養殖開発－

チーフアドバイザー
枝 浩樹

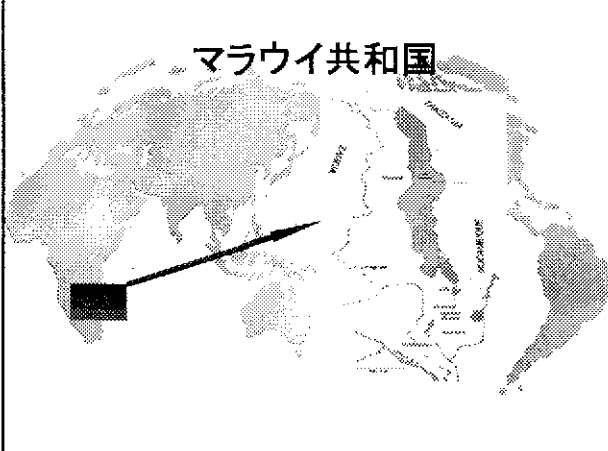
[スライド1]



マラウイ在来種増養殖技術開発計画
～生物多様性の保護と養殖開発～

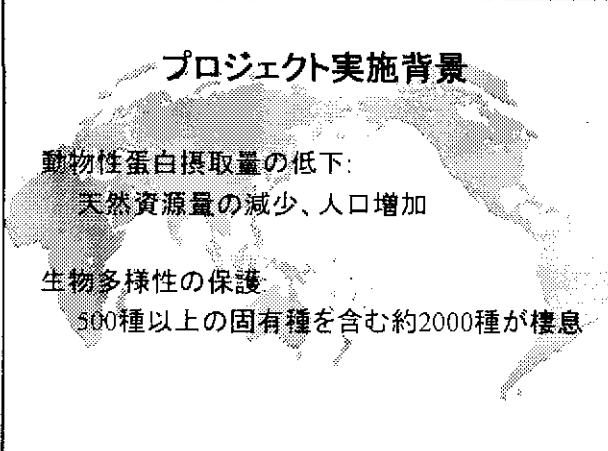
チーフ・アドバイザー
枝 浩樹
平成14年12月6日

[スライド2]



マラウイ共和国

[スライド3]



プロジェクト実施背景

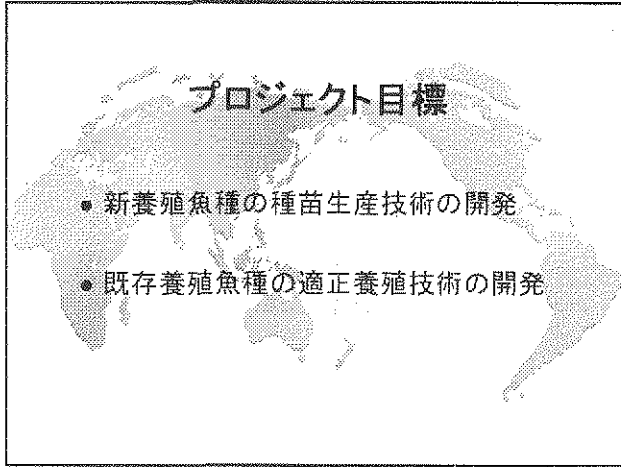
動物性蛋白摂取量の低下:
天然資源量の減少、人口増加

生物多様性の保護
500種以上の固有種を含む約2000種が棲息

[スライド4]

プロジェクト目標

- 新養殖魚種の種苗生産技術の開発
- 既存養殖魚種の適正養殖技術の開発



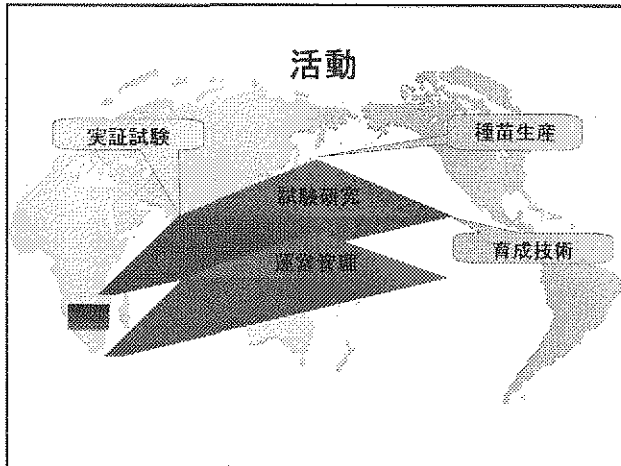
[スライド5]

活動

実証試験 種苗生産

試験研究 育成技術

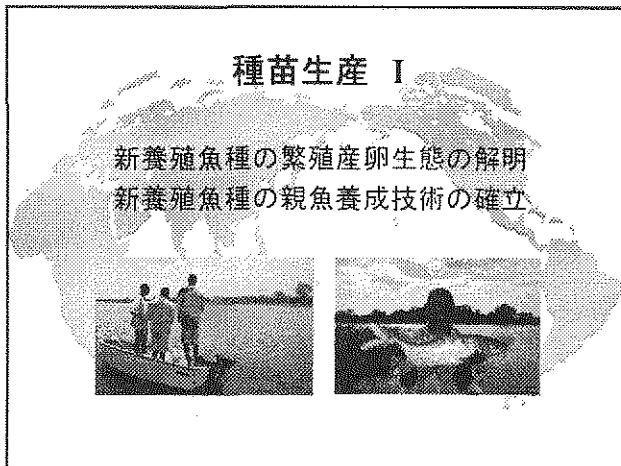
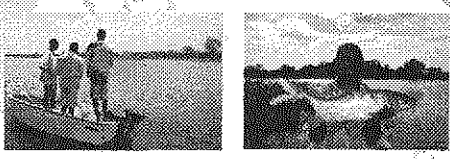
産卵管理



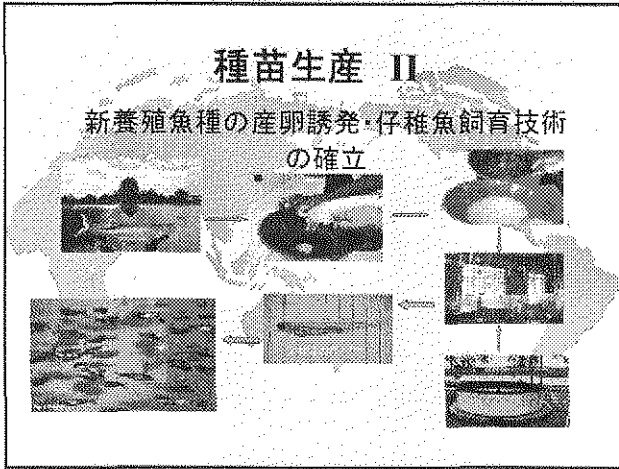
[スライド6]

種苗生産 I

新養殖魚種の繁殖産卵生態の解明
新養殖魚種の親魚養成技術の確立



〔スライド7〕



〔スライド8〕



〔スライド9〕



[スライド10]

運営・管理

持続可能性のための体制整備



[スライド11]

マラウイにおける養殖形態

- 貧困な村落での個人養魚
国民の大多数を占める
- 貧困な村落での集団養魚
直接・間接的に村長制度が関与
- 教会が組織した営農集団の中での養魚
布教の中での貧困対策
- 商業養殖

[スライド12]

マラウイにおける養殖開発の課題

- 極度の貧困
餌・肥料の不足
低い基礎教育
交通網の不備
養魚資材の不足
普及員の活動の制限
- 池の保水性

[スライド13]

マラウイにおける養魚普及のあり方
～これからの活動方針～

- 農業の活性化と副業としての養魚
- 養魚形態に応じた養魚方式の開発
- 教育セクターとの連携
- NGOやボランティアとの連携

トリニダード・トバゴ持続的海洋水産資源利用促進計画
ーカリブ海における広域技術協力ー

チーフアドバイザー
千賀 和雄

[スライド14]

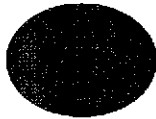
カリブ海における広域技術協力

平成14年12月6日

トリニダード・トバゴ持続的海洋水産資源利用促進計画

[スライド15]

**背景: 水産を観光に次ぐ基幹産業として
育成する**



- トロール漁業における混獲魚の投棄
- 浅海における小魚の捕獲
- スクーバダイビングによるロブスター及びコンク貝の採捕
- ダイナマイト漁法
- 三枚網によるサンゴ礁でのロブスター漁
- 廃油流出による海洋汚染
- 生活排水による海洋汚染

[スライド16]

新旧プロジェクトの比較

トリニダード・トバゴ漁業訓練計画 1996.4 ~ 2001.3	持続的海洋水産資源利用促進計画 2002.9 ~ 2006.9
【プロジェクト目標】 カリブ漁業開発訓練所(CFTDI)の技術・研修内容の質が向上し、水産分野の人材育成能力が強化される。	【プロジェクト目標】 水産局とカリブ漁業開発訓練所(CFTDI)の相互協力により、水産資源を持続的に利用するための普及および訓練活動が実施される。

広域技術協力推進事業

[スライド17]

持続的海洋水産資源利用促進計画

活動内容

1. 水産資源管理分野

- 調査員訓練プログラムの実施
- 漁獲量、漁獲努力量および生物学的データの収集
- 零細・沿岸漁船からの漁獲量、水揚げ量、漁獲努力量を用いたCPUE(単位努力量当たり漁獲量)分析
- 社会経済データおよび情報の収集、分析
- かく、刺網を対象にした漁具選択性の研究
- トバゴ島プロジェクト(水産統計の確立、トビウオの漁獲量、努力量データの解析、トビウオ系統群の特徴調査)
- 適切な水産資源管理の方策のガイドラインの作成

[スライド18]

2. 試験操業技術・漁具開発分野

- 漁具選択性のための試験操業の実施
- 導入された漁具の適正評価
- 紹介された指導法、教材の開発

3. 水産食品加工技術・流通分野

- 流通における水産物消費データの収集
- 模範的漁獲物処理場の設置に関する助言
- 新加工製品の開発
- 市場外販売施設の現況調査
- 全国レベルでの適切な鮮魚取り扱い手法の促進

[スライド19]

4. 漁船機関分野

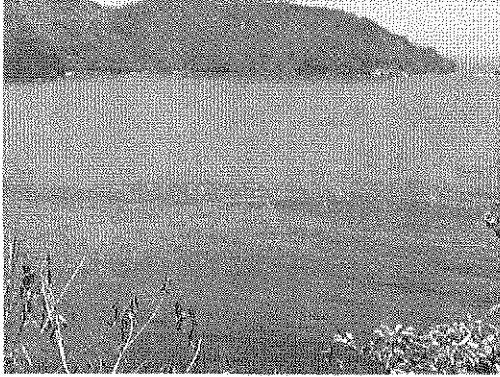
- 漁船機関の保守管理
- 適正な漁獲物保存のための冷凍装置保守管理
- 油圧機械の保守管理

5. 水産普及分野

- トリニダード島およびトバゴ島水産局普及員に対する普及手法の訓練
- 水産局普及員に対する4分野(水産資源管理、試験操業技術・漁具開発、水産食品加工技術・流通、漁船機関)の技術訓練
- 普及活動促進委員会による普及活動を通じた水産業従事者の資源管理活動への参画促進
- 普及員による訓練活動計画の策定と情報資料の作成

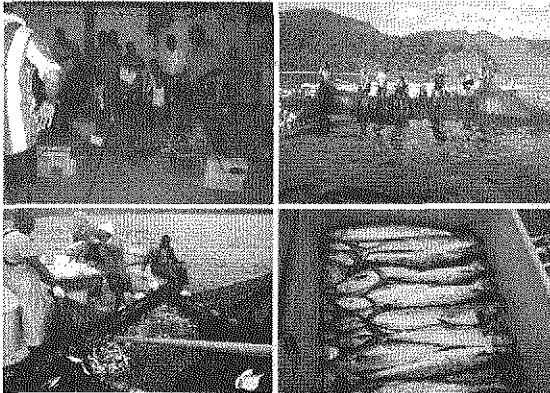
[スライド20]

カリブ海に初めて設置された定置網(猪口網)



[スライド21]

漁業者への説明会・操業・漁獲物(サワラ)



[スライド22]

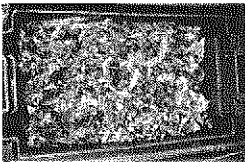
水産資源と環境への対応



浮魚礁の普及



かごでもロブスターは獲れる!




魚の残滓利用



資源管理に関する共通認識

[スライド23]



4ストローク船外機の紹介

生質の利用

未利用資源の利用(ソデイカ)

[スライド24]

広域技術協力推進事業

広域技術協力推進事業とは、自然環境、社会経済状況、技術水準等が類似する一定地域内の一国で実施中のプロジェクトを拠点として、当該一定地域内の諸国における同一分野の人材を育成することを目的として、JICAが国際約束に基づいて実施する以下の事業を言う。

- 研修員の受入れ
- 専門家とカウンターパートの派遣
- 機材供与

[スライド25]

協力内容： 漁業技術、水産資源管理、水産加工、漁船機関保守に関する技術移転

対象国： アンティグア・バーブーダ、バルバドス、グレナダ、ドミニカ連邦、セント・ルシア、セント・ヴィンセント、セント・クリストファー・ネイヴィース、ジャマイカ、ドミニカ共和国、ハイティ

実績： 1997年～2002年

研修員受入数	118人
専門家・C/P派遣による研修会参加者数	413人
合計	531人

[スライド29]

成果

- 域内の水産業従事者の技術が向上した。
- 域内諸国の水産局の指導体制が強化された。
- 域内諸国間のネットワークが強化された。
- 水産無償との連携が強化された。
- 広域企画調査員、個別専門家との連携が強化された。
- プロジェクトのC/Pの技術が飛躍的に向上した。
- トリニダード・トバゴ水産局職員の知識・技術が向上した。
- トリニダード・トバゴ政府が域内におけるリーダーシップを認識するようになった。

[スライド30]

課題

- 広域技術協力の拡張(未対象国への対応)。
- 活動の拡充。
- 域内諸国の要請にタイムリーに応えられるような体制作り。
- 専修コースへの衣替え。
- 国別対策への取り組み。
- 短期専門家の活用。
- モニタリング・評価の強化。

水産分野課題別検討会

中間報告

国際協力事業団
森林・自然環境協力部
水産環境協力課 課長代理
西本 玲

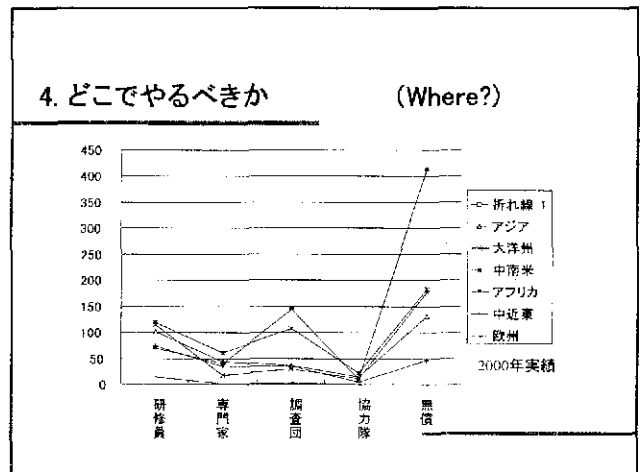
[スライド13]

3. いつ水産協力をやるべきか (When?)

* 以下の各々の段階に適した水産協力が必要

- 自給自足経済 ⇒ 市場経済
- 動物性蛋白質不足 ⇒ 栄養過剰
- 低漁獲状態 ⇒ 過剰漁獲状態
- 沿岸漁業 ⇒ 沖合い漁業 ⇒ 遠洋漁業
- 入漁 ⇒ 貿易 ⇒ 投資

[スライド14]

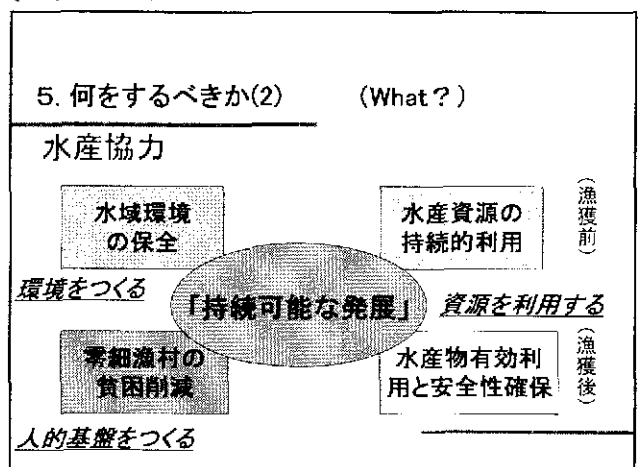


[スライド15]

5. 何をすべきか(1) (What?)

<日本の比較優位>	<JICAの比較優位>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 1. 漁業大国 ■ 2. 水産消費(輸入)大国 ■ 3. 少量多種資源を対象とした沿岸資源構造 ■ 4. 高度な技術研究 - 魚病、バイオ、生産コスト削減 ■ 5. 水産物加工の多様性 ■ 6. ソフト分野の経験(漁業管理、環境対策、零細漁村振興) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 1. 技術協力ノウハウ(人、物、金) ■ 2. 政府(二国)間協力(公的機関への支援) ■ 3. 水産専門機関ではない ■ 4. 水産分野国内機関からの協力

[スライド16]



[スライド17]

5. 何をすべきか(3) (What?)

?「持続可能な発展」のために必要な水産協力?

- (1) 水域環境の保全
- (2) 零細漁村の貧困削減
- (3) 水産資源の持続的利用
- (4) 水産物有効利用と安全性確保

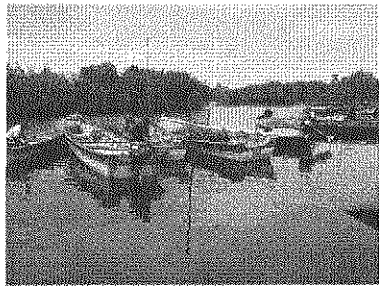
[スライド18]

(1) 水域環境の保全 (Global Issue: 環境)

- 1-1. 水産資源の増殖に必要な環境改善
- 1-2. 産卵・生息環境の維持・保全
- 1-3. 水域環境破壊・汚染の防止

[スライド7]

JICA水産分野協力の5W1H



[スライド8]

JICA水産分野協力の5W1H

- 1. なぜ水産協力を行うのか (Why?)
- 2. 誰が水産協力を行うのか (Who?)
- 3. いつ水産協力を行うべきか (When?)
- 4. どこでやるべきか (Where?)
- 5. 何をやるべきか (What?)
- 6. どうやるべきか (How?)

[スライド9]

1.なぜ水産協力を行うのか(1) (Why?)

<国際協力の目的>

- 1. 人道支援(貧困、飢餓等)
 - ⇒ 例: 零細漁民の家計が向上する 等)
- 2. 社会経済・地域の安定
 - ⇒ 例: 養殖開発普及を通じた地域振興 等)
- 3. 日本の国益への被益
 - ⇒ 例: 水産関係のネットワーク構築 等)

[スライド10]

1.なぜ水産協力を行うのか(2) (Why?)

<水産協力の目的>

- 1. 水産業振興
 - ⇒ 水産資源の限界、営利活動との区分)
- 2. 我が国の水産資源の確保
 - ⇒ 短期的視点のみ、途上国ニーズとの関係)
- ○3. 持続可能な発展(開発)
 - ⇒ 長期的視点、援助方針に合致)



[スライド11]

「持続可能な発展(開発)」とは

<考え方>

- 将来の世代がそのニーズを満たすための能力を損なわず、現世代のニーズも満たす発展(開発)

<水産協力>

- 漁獲漁業⇒資源管理による水産資源の再生が可能な漁業
- 増養殖 ⇒環境に過大な負荷をかけずに継続可能な増養殖

<根拠>

- 政府開発援助大綱(基本理念)
- 持続可能な開発に関する世界首脳会議(WSSD)(2002)

[スライド12]

2. 誰が水産協力を行うのか (Who?)

■ <多様なニーズへの対応>

⇒住民参加型協力の導入拡大

(日本側/相手国側双方の様々な関係者の参加)

1. 民間委託型の技術協力の推進

従来参加できなかった様々な関係者が協力参加可能に

2. 草の根技術協力事業

市民の発意による国際協力事業支援を通じた市民の事業参加(地域提案型、草の根支援型、草の根パートナー型)

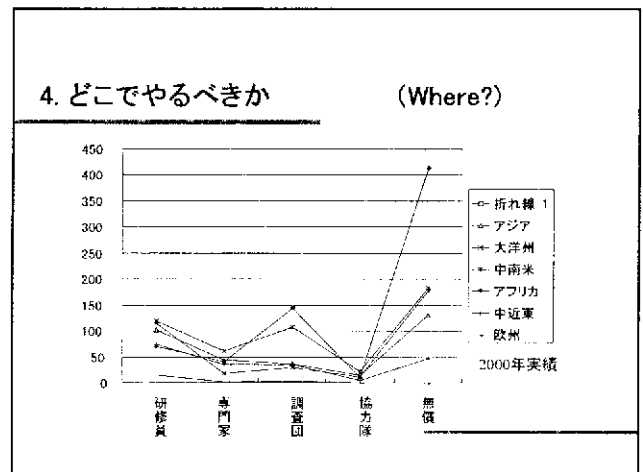
[スライド13]

3. いつ水産協力をを行うべきか (When?)

* 以下の各々の段階に適した水産協力が必要

- 自給自足経済 → 市場経済
- 動物性蛋白質不足 → 栄養過剰
- 低漁獲状態 → 過剰漁獲状態
- 沿岸漁業 → 沖合い漁業 → 遠洋漁業
- 入漁 → 貿易 → 投資

[スライド14]

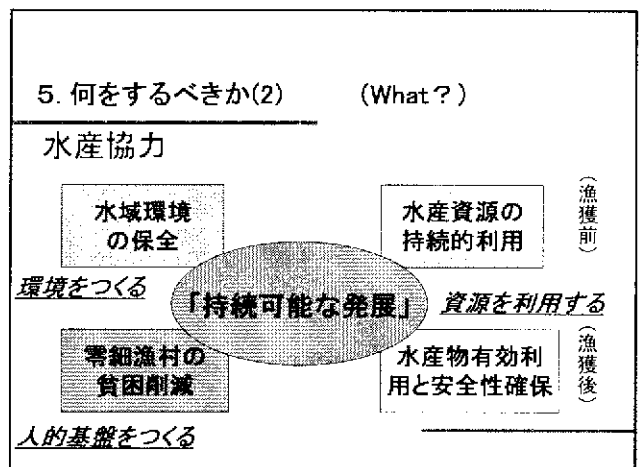


[スライド15]

5. 何をすべきか(1) (What?)

<日本の比較優位>	<JICAの比較優位>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 1. 漁業大国 ■ 2. 水産消費(輸入)大国 ■ 3. 少量多種資源を対象とした沿岸資源構造 ■ 4. 高度な技術研究 - 魚病、バイオテック、生産コスト削減 ■ 5. 水産物加工の多様性 ■ 6. ソフト分野の経験(漁業管理、環境対策、零細漁村振興) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 1. 技術協力ノウハウ(人、物、金) ■ 2. 政府(二国)間協力(公的機関への支援) ■ 3. 水産専門機関ではない ■ 4. 水産分野国内機関からの協力

[スライド16]



[スライド17]

5. 何をすべきか(3) (What?)

? 「持続可能な発展」のために必要な水産協力?

- (1) 水域環境の保全
- (2) 零細漁村の貧困削減
- (3) 水産資源の持続的利用
- (4) 水産物有効利用と安全性確保

[スライド18]


(1) 水域環境の保全 (Global Issue: 環境)

- 1-1. 水産資源の増殖に必要な環境改善
- 1-2. 産卵・生息環境の維持・保全
- 1-3. 水域環境破壊・汚染の防止

[スライド19]

(2) 零細漁民の貧困削減
(Global Issue: 貧困)


- 2-1. 漁獲量の増大
- 2-2. 水産業収入の増大
- 2-3. 漁村コミュニティの振興



[スライド20]

(3) 水産資源の持続的な利用
(⇒FAO「責任ある漁業のための行動規範」)


- 3-1. 水産政策・施策の確立、実施
- 3-2. 漁獲の適切化
- 3-3. 持続的な養殖の促進
- 3-4. 未利用資源の利用
- 3-5. 水産資源の増殖



[スライド21]

(4) 水産物有効利用と安全性確保
(Global Issue: 食糧安全保障)

- 4-1. 水産物の安全性確保
- 4-2. 漁獲物の有効利用

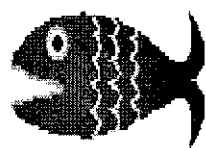


[スライド22]

6. どうすべきか(1) (How?)

<水産分野協力のアプローチ>

- 1. 法制度整備
- 2. 行政体制整備
- 3. 技術移転
- 4. 普及体制整備
- 5. 漁民の参加



[スライド23]

6. どうすべきか(2) (How?)

協力の分野とアプローチ

協力の分野	アプローチ	1.法制度整備	2.行政体制整備	3.技術移転	4.普及体制整備	5.漁民の参加
1.漁業						
2.増産						
3.漁獲物処理/水産加工						
4.水産品質保証						
5.水産資源管理						
6.水産技術改善及普及						
7.水産経営風土体制						
8.漁業の持続						
9.水産金融制度						
10.水産対策						
11.磯辺地、マングローブ、藻場、干潟の保全						
12.河川、湖沼、森林の保全						

[スライド24]

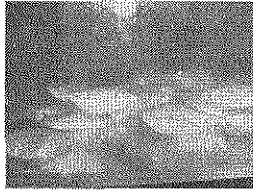
地球規模的課題(Global Issue)との関係



[スライド25]

地球規模的課題(Global Issue)とは

- <考え方>
- グローバル化の進展の中で地球規模の問題が顕在化。国際社会が一体となって取り組むべき課題。
- <内容>
- 環境、ジェンダー・WID、貧困
- その他(教育、人口・エイズ、障害者支援、平和構築 他)
- ⇒ 食糧安全保障、島嶼国支援



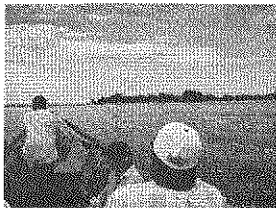
[スライド26]

水産協力と地球規模的課題(Global Issue)

国	水産協力の分野(グローバル・イシュー)				地球規模的課題			
	環境	ジェンダー	WID	貧困	環境	ジェンダー	WID	貧困
日本	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進
途上国	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進	水産資源管理 水産資源持続性 水産資源保護 水産資源増進

[スライド27]

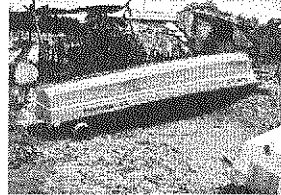
利点(プラス面)



- 水産分野の重要性が内外に理解されやすい
- 協力目標の設定、分野毎の優先度の設定が容易になる
- 特定の水産技術移転にしばられない広い視点での協力がやりやすくなる

[スライド28]

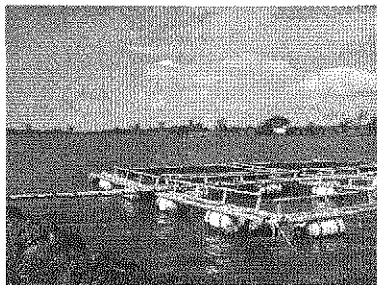
問題点(マイナス面)



- 水産色が薄まり水産の専門的視点が弱まる
- 地球規模的課題だけでは途上国の水産ニーズをカバーできない
- 島嶼国支援、内陸国支援等地域的課題にも留意が必要

[スライド29]

今後の課題



[スライド30]

今後の課題
今までに出された様々な意見(1)(参考)



- <水産協力全般>
- 「技術移転型」から「問題解決型」に。
- 協力計画に「公共性」の基準を含めるべき。
- 沿岸資源管理の必要性和コスト高。
- 水産業の特殊性(例:動物蛋白質の供給、自由なアクセス、再生産型資源)を考慮した計画策定が必要。
- 「FAO責任ある漁業のための行動規範」をどう取り込むか。
- 水産分野で途上国の自立支援のあり方を考えるべき。他

[スライド31]

今後の課題

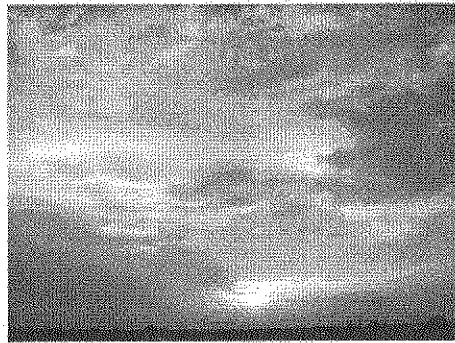
今までに出された様々な意見(2)(参考)



<Global Issue>

- Global Issue はドナー側の考え方。途上国側には別の考え方あり。
- 大規模資源回復プロジェクトは困難。重点項目を絞り込むべき。
- 零細漁民の生活向上は、個人でなく漁村・コミュニティに焦点を当てるべき。
- 従来の水産協力に入らない水域環境協力等のノウハウは他分野から得るべき。
- Global Issueにこだわらず経済的側面から考えることも必要。 他

[スライド32]



END